

第三百六十四回 青葉会

平成二十八年七月二十八日(木)

午後五時半〜八時半

丸紅来客食堂(談話室)

〈顧問〉 ☆ 川合万里子 先生

〈選者〉 ◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 川口孤舟 久米五郎太 後藤保明 小西弘子 豊田ゆたか

中野一灯 星田啓子 山崎亜也 山内天牛

伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 渡邊盛雄

赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明

村田くに子 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

十点 ☆◎ 鎌倉をゆく禅僧のサングラス

昇 (○万・孤・保・千・龍・敏・灯・允  
く・天)

八点 ☆ 大川端とて柳一本夏芝居

(☆↓「夏芝居大川端の一本柳」。猿之助らの「荒川佐吉」)

弘子 (紀・万・彦・敏・ゆ・允・亜・天)

☆◎ 風鈴や夫婦会話の句読点

健介 (眞・猛・○万・孤・彦・ゆ・灯・正)

☆◎ 野生馬の粗きたて髪海霧垂(じりしる)

一灯 (紀・○万・孤・五・允・啓)

(☆…「垂る」↓「垂り」)

一灯 (紀・○万・孤・五・允・啓)

☆ 鱧づくし相客母娘の京ことば

亜也 (紀・○万・保・弘・千・灯)

☆ 来し方を確と見据うる蟬の殻

孤舟 (堅・○万・正・啓・三)

(☆↓「空蟬や来し方を確と見据ゑをり」)

弘子 (○万・孤・五・亜・天)

☆◎ ゆつくりと橋潜る舟梅雨明くる

弘子 (○万・孤・五・亜・天)

(☆↓「梅雨明けやゆつくりと橋を潜る舟」)

盛雄 (眞・紀・猛・孤・弘)

◎ 生れてすぐフアインテングポーズ子蠟螂

盛雄 (眞・紀・猛・孤・弘)

(☆…中七に日本語で適訳は無いであろうか?)

(喧嘩の構え?)

四点 ☆ 回転ドア書肆の涼気を裏返す

孤舟 (○万・弘・敏・灯)

(☆…「裏返す」↓「裏返し」)

☆ 風紋を素足でなぞり夏砂丘

ゆたか (猛・万・く・亜)

叩き込む犬釘の音鉄路灼く

一灯 (弘・啓・く・天)

(☆↓「犬釘を叩き込む音鉄路灼け」)

☆ ふうはりと両手にあまる白芍薬

啓子 (眞・猛・万・千)

☆◎ 妹の如き妻なり金魚草

規雄 (万・孤・保・三)

☆ 天と地を繋ぐ黒雲雷を秘む

そらお (眞・万・く)

(☆↓「雷を秘め天地を繋ぐ雲黒し」)

☆ どの窓も運河へ開く夏夕べ

弘子 (万・彦・保)

癌克服二度が自慢や大ジョッキ

恵洲 (敏・ゆ・正)

(☆…「ジョッキ」だけでは季語にならない)

☆ 祖母言ひし冷やし西瓜に塩ふりや

堂哉 (万・龍・ゆ)

☆◎ やませ這ふ南部風土記の田に畑に

一灯 (万・孤・ゆ)

(☆↓「山背吹く南部風土記の田畑荒れ」)

夏比叡法燈高く谿深し

亜也 (五・灯・三)

風鈴の音に気付けば風の来る

啓子 (堅・猛・正)

(☆↓「風立つや風鈴の音に気付かされ」)

天牛 (眞・灯・正)

暑気中りするほどの日に血を採らる

天牛 (眞・灯・正)

(☆…「採らる」↓「採られ」)

二点 ☆ 板の間に枕一つで昼寝かな

そらお (万・保)

☆ 汗見せぬでつかい見得も十八番

紀久男 (万・敏)

(海老蔵の「景清」)

- 夏木立蔓葉絡んで空をけす  
 猛 (千・龍)
- 鳶と葉の勢い覆ふ夏小径  
 全 (堅・千)
- アルバムはタイムカプセル星涼し  
 孤舟 (保・允)
- (☆)俳句はわづか十七音の短詩ゆえ、上五中七共にカタカナ書きの外国語は煩わしい)
- 万願寺ほんのり甘く二人旅  
 五郎太 (亜・三)
- 風に乗りまだらに聞こゆ祇園会や  
 保明 (万・ゆ)
- (☆)「祇園会のまだらな韻(ひび)き風に乗り」
- 遠雷を肴に一献悪からず  
 全 (万・龍)
- 夕立に追はれて走る子ら疾し  
 全 (龍・ゆ)
- 曇天に重なり重なり青芭蕉  
 弘子 (五・啓)
- (☆)「幾重にも芭蕉葉重なり曇り空」
- 梅干すや妻発熱にうろたえぬ  
 健介 (正・天)
- サングラス似合ひて機長頼もしく  
 恵洲 (紀・万)
- ☆ 夏草を食みつ親追ふ小鹿たち  
 ゆたか (万・龍)
- ☆ 緑樹光金剛力士のにらみ利き(東大寺南大門)  
 全 (弘・敏)
- ◎ 鳴り響くエイトビートや海開き  
 一灯 (孤・く)
- ☆ 茅の輪くぐる婦人を先に異国人(鎌倉八幡宮)  
 昇 (万・三)
- ☆ ひつそりと雨音聴きて森に佇(た)つ  
 啓子 (堅・く)
- ☆ 宵山やゆかたの背(せな)のそぞろ行く  
 亜也 (五・啓)
- ☆ 宵山や町屋の宴に舞妓ゐて  
 全 (弘・允)
- ☆ 水茄子を肴に都知事談義かな  
 天牛 (紀・万)
- ☆ 大輪の向日葵一輪売地あり  
 全 (紀・千)
- ☆ 当り役見せ場あつさり涼しげに  
 紀久男 (彦)
- 一点  
 (☆)上五↓下五) (猿之助の「荒川佐吉」)
- 小庭から涼気届いて書すすむ  
 猛 (堅)
- つるつると揚げ茄子おろし昼餉蕎麦  
 全 (堅)
- ☆ 昼下り眠り誘ふ団扇かぜ  
 全 (彦)
- ☆ 子と孫へ願ひの糸の女文字  
 忠彦 (〇万)
- (☆)七夕竹の描写が美しい) (「願ひの糸」が季語)
- ☆ 花屋より七夕竹買ふ娘(こ)は母に  
 全 (紀)
- ☆ 夕月に添ふ星ひとつピアガーデン  
 孤舟 (万)
- ☆ 滝壺へ魂(たま)喚ひ込まれゆく(ごと)し  
 全 (五)
- ☆ 殿(しんがり)は凱旋鉦の後祭  
 五郎太 (天)
- ☆ 揚げ立ての稚鮎の群れに箸を入れ  
 全 (猛)
- ☆ ざぶざぶと墓に水掛く炎暑かな  
 全 (亜)
- ☆ すうすうと素足投げ出し男寝る  
 弘子 (亜)
- ☆ 見下ろせば日傘の集ひ抽象画  
 保明 (〇万)
- (☆)「見下ろせば抽象画めく日傘群」
- ☆ ブランドの父の日傘の持ち重り  
 堂哉 (万)
- ☆ 老鶯の限りの声の澄みわたる  
 ゆたか (啓)
- ☆ 朝化粧中に紅さす白槿花  
 啓子 (天)
- ☆ 綱取りの夢は来場所夏の露  
 盛雄 (万)
- ☆ かなかなや馬籠妻籠は山の中  
 全 (允)

● 次回青葉会

八月二十五日(木) 午後五時半から八時半 丸紅 コンチエルト(バンケットルーム)

▲ 当季雑詠五句 投句二句

九月二十一日(水) 午後六時から九時 文京区民センター3のB室

十月二十七日(木) 午後六時から九時 文京シビックセンター5階D会議室

以上文責 紀久男

平成二十八年七月句会報

一 今回は天牛さんから11名出席。投句8名。(一)万里子先生からのお手紙(暑中見舞のお礼と俳句作りに励んで貰いたいこと: 脳の老化抑制。心友の確得に役立つ等)(二)孤舟さんから「俳句界」8月号(「爽樹」5周年記念祝賀会での川口襄代表挨拶のスナツプ: カラーグラビア)(三)一灯さんの合同句集「炉火」Ⅲ(一灯さんが支部長の「伊吹嶺」関東支部23名各20句)(四)惠洲さんからの三吟歌仙「若葉風の巻」(捌き役の惠洲さん、そらおさん、寸晴さんの連句)(五)一灯さんの句集「夜霧」の句評: 伊吹嶺同人清水弓月氏と惠洲さんの寸評を回覧し乍ら開始。猛さんの披露で御覧のように昇さん、弘子さん、健介さんが高得点でした。

NHKTVのロッキード特集や伊藤忠の株価急落等を話題にしつつ、先生からの「井の頭煎餅」(東急百貨店)「吉祥寺吉日羊羹」(阿佐ヶ谷のとらや椿山)、弘子さんの「庄之助最中」、啓子さんの大吟醸「刈穂超辛」(秋田・大仙市)、小生の純米「奈良萬」(福島・喜多方)を賞味堪能。コンチエルトからもピザのサービスもあり大いに盛り上がった次第です。

九月からの句会場選びは、社友会事務局と所管の丸紅サービスとも協議しましたが、神楽坂の丸紅コート(社友談話室)は予約制でない為断念し、萬緑の吟行で時々利用している文京区の区民センター又はシビックセンターの一室を借りることにしました。申込手続を区民である弘子さんにお願いくることに致しました。句会終了後、社友会の「紅レポート」掲載用の集合写真を啓子さんにお願ひしました。

二 関係者近詠

祝 宮坂恵子様

風つこの佳吟つぎつぎ萬緑光

万里子

絶望を生きてる妻のころもがへ

青史

そよ風や噴水三基の音閑か

全

若竹その伸びゆくちから妻に欲し

全

さつき燃え熱弁続くロケツト展

全

青葉闇問ひふかぶかとふかぶかと

全

追着くも人違ひなる白日傘

全

目尻下げ孫のお披露目夏芝居

全

目高無事二泊三日の旅了り

全

冷房の邦楽会場客少な

全

戸袋を百足這ひ出す実家かな

全

「萬緑」 八月号

茄子苗を植ゑて米寿を迎へけり

全

荒れ畑に剃刀のごと青芒

全

恋に恋する間は多弁花密柑

全

かなかなや弔ふごとく呼ぶごとく

全

緑陰や棟梁囲み昼休み

全

シナ海の争ひの場を大夕焼

全

豆飯を詰め保護観察の面接へ

全

夕立や殺し場浄め幕降りて

全

教会へAED届き枇杷たわわ

全

「きさらぎ句会」7月

夫へ託す出掛けの電話セラニウム

全

晩夏光海へ押し入る大河かな

全

女子高の始業のチャイム桜の実

全

ひと休みして螢火の湧き出づる

全

青蔦壁人吸はれては吸はれては

全

日盛をサイレン幾度救急車

全

友を待ち夏鶯の次を待つ

全

合宿の猛訓練や冷し瓜

全

「記憶」へと薄暑の街を小走りす

全

友来る不義理恨めし夏の風邪

全

聖五月妻のかんばせ神さびて

全

青史

妻を起さぬやうに夏暁の厨ごと

全

三 一灯さんの句集「夜霧」で採り上げた惠洲さんの寸評三句

登山杖雨のすみれを避けて突く

全

一灯

冬山へひとり夜行の発車ベル

全

下山して新そばで酌む酒二合

全

平成二十八年八月十八日

紀久男記